

第5回九州地域医療研究会in熊本

継続的に地域貢献できる医師の養成
～2017年度から開始される新しい専門医制度に向けて～



日時

平成27年4月25日（土曜日）13時～18時まで

会場

熊本大学医学部 山崎記念館
熊本市中央区本荘1-1-1

お問い合わせ

860-8556

熊本市中央区本荘1-1-1

熊本大学医学部附属病院

Tel: 096-373-5627

地域医療支援センター

Fax: 096-373-5796

第5回九州地域医療研究会 概要

テーマ	継続的に地域貢献できる医師の養成 ～2017年度から開始される新しい専門医制度に向けて～
当番世話人	松井 邦彦 (地域医療システム学寄附講座 特任教授)
日時	平成27年4月25日(土曜日)13時～18時まで
会場	熊本大学医学部 山崎記念館 熊本市中央区本荘1-1-1
担当	小山 耕太 (地域医療システム学寄附講座 特任助教)
事務局	〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1 熊本大学医学部附属病院 地域医療支援センター Tel: 096-373-5627 Fax: 096-373-5796

世話人会

時間	13時00分～13時30分まで
会場	研究会会場と同じ
	13時00分～13時10分 会長ご挨拶 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 国際離島医療学分野／国際島嶼医療学講座 教授 嶽崎 俊郎 先生
	13時10分～13時30分 世話人会

懇親会

日時	18時00分～21時まで
会場	「松葉」 熊本県 熊本市中央区 新町 2-5-12

皆様へのお願い

- ・受付 12:00から会場前にて行います。受付でネームプレートをお受取りください。また、懇親会に参加される方は、受付の際に会費をお支払い下さい。
- ・参加者の皆様へお願い
ご発言・ご質問は座長の許可を得たうえで、所属と指名を明言して頂きますようお願い致します。
- ・演題発表(学生)
発表時間は5分、質疑応答時間は3分です。
- ・演題発表(教員)
発表時間は10分、質疑応答時間は5分です。
いずれも時間厳守でお願い致します。
- ・演者の方へお願い
動作確認の為、当日スライド受付は30分前までにお済ませ下さい。原則として持参のPCプレゼンテーションと致します。USBで持参される際は、予めWindowsのPower Pointファイルでご持参ください。



駐車場ののご案内



- | | |
|------------|----------------|
| ① 福利厚生棟 | ⑤ 臨床医学教育研究センター |
| ② 医学部臨床研究棟 | ⑥ 医学教育図書棟 |
| ③ 外来臨床研究棟 | ⑦ 医学総合研究棟 |
| ④ 基礎医学研究棟 | ⑧ 設備管理棟 |

正門から入場し、左側の病棟入口へお入りください。
入場してすぐの左側の立体駐車場が確実に空いていて便利です。
最寄りの駐車場は、入院患者様のご家族が多く駐車されますので、なるべく、上記立体駐車場をご利用下さい。

プログラム

13:30～13:40 開会のあいさつ

第5回九州地域医療研究会 当番世話人

熊本大学医学部附属病院 地域医療支援センター 特任准教授
谷口 純一

13:40～14:20 演題発表(学生)

座長:小山 耕太(地域医療システム学寄付講座 特任助教)

<演題①>「卒業前に抱く疑問や不安」

熊本大学医学部医学科6年 平賀 円

<演題②>「総合診療科に関する疑問」

宮崎大学医学部医学科5年 枝元 真人

<演題③>「与論島方言調査実習を通して」

鹿児島大学医学部医学科1年 曾原 純

<演題④>「鹿児島の地域医療を見て」

鹿児島大学医学部医学科3年 大漣 玄德

<演題⑤>「大学における地域医療教育と学生の効果的な能動的学習促進について」

長崎大学医学部医学科6年生 山崎 愛子

～休憩(5分間)～

14:25～15:25 基調講演

座長:谷口 純一(地域医療支援センター 特任准教授)

「とる?とらない? 専門医—地域医療ならいらないの?」

高知医療再生機構 理事長

倉本 秋 先生

～休憩(10分間)～



プログラム

15:35～17:20 演題発表(教員)

座長: 谷口 純一(地域医療支援センター 特任准教授)

<演題⑥>「久留米大学医学部での地域卒学生の現状」

久留米大学医学部、地域医療連携講座
足達 寿

<演題⑦>「医療系学部学科1年生を対象にした方言調査実習の試み」

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター
根路 銘 安 仁

<演題⑧>「継続的に地域貢献できる医師を養成するためには」

～地域医療のイメージをかえる～

宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学講座
松田 俊太郎

<演題⑨>「大分大学における地域医療従事者の育成とキャリア形成の両立への取り組み」

大分大学医学部地域医療学センター 外科分野
上田 貴威

<演題⑩>「長崎県内の総合診療専門医育成にむけて連携の取り組み」

～総合診療専門医(家庭医療専門医)養成のための長崎県版連携プログラム～

長崎大学病院 へき地病院再生支援・教育機構
ながさき県北地域医療教育コンソーシアム
中桶 了太

<演題⑪>「地域医療実践教育拠点玉名の設置について」

熊本大学医学部附属病院 地域医療システム学寄附講座
田宮 貞宏

<演題⑫>「熊本県の地域医療の医師不足・偏在状況について」

～県下有床病院における「地域医療アンケート調査」中間報告～

熊本大学医学部附属病院 地域医療システム学寄附講座
小山 耕太

17:20～17:35 総合討論

17:35～17:45 閉会のあいさつ

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
国際離島医療学分野／国際島嶼医療学講座 教授

嶽崎 俊郎 先生

懇親会

日時 18時00分～21時まで

会場 「松葉」 熊本県 熊本市中央区 新町 2-5-12

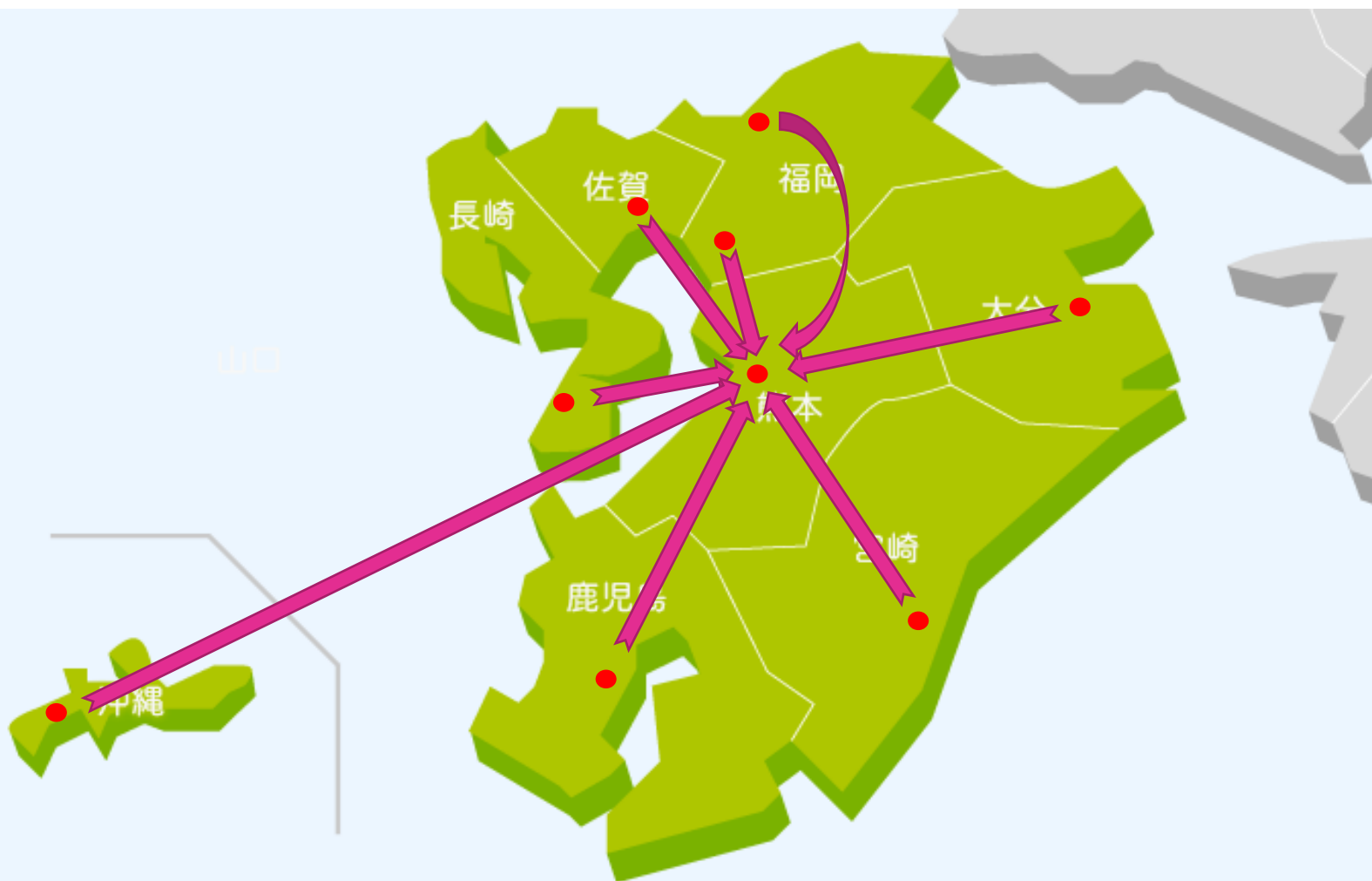




抄

録

なんさん
熊本に来てはいよ
(とにかく、熊本に来てください)



<演題①>

「卒業前に抱く疑問や不安」

○平賀 円

熊本大学医学部医学科6年

熊本大学地域医療システム学寄附講座に関与する学生(以下、地域枠学生)は現在約40人である。活動内容は、毎月1回の地域医療勉強会、自治医科大学と合同で2泊3日の夏季地域医療実習、交流会などである。昨年度は地域枠学生から初めての卒業生が誕生した。

これからは私たちが6年生となり、地域枠学生をリードし、これからの一年間でどれだけ発展させることができるのかが課題である。地域で働くゴールは誰も教えてくれないし、先輩らの前例もまだ無い状況である。その様な状況にある我々地域枠学生に、今必要なことは、「明確なキャリアプランを組み立てていくこと」と考えている。義務年限中に広い分野の専門医資格取得のための研修が、更に可能となれば、将来のビジョンも見えてくると考える。地域枠学生として勉強したことを糧に、将来の県の医療、日本全体の医療に貢献したいという高い志を持ちたい。

学生がキャリアプランを立てるためには、地域医療についてもっと学ばなければいけない。各県ではどのような医療改革を行っているのか、九州の地域医療ネットワークはどのような様になっているのか、学生同士の情報交換はどのようにしたら良いのか、今回、この九州地域医療研究会でいろいろなことを吸収したいと考えている。

<演題②>

「総合診療科に関する疑問」

○枝元 真人

宮崎大学医学部医学科5年

診臨床研修医制度において、総合診療科は19番目の基本領域として位置付けられているが、その定義や理解が人によって様々なのが現状だと感じている。このような背景から、2つの疑問を提示したい。

①総合診療科の必要性を理解してもらうためにはどのような活動が必要か？

総合診療医の必要性が、学生に対して十分に理解されていないように思われる。へき地医療の見学や、全人的医療の重要性を説く講義などが提供されているが、心情的に訴える部分は大きいものの、社会的に総合診療医が必要とされていることに関しては十分には伝わっていないように感じている。高学年の学生に対し、総合診療医の役割や地域医療の社会的意義について、広い視野からあらためて感じてもらう機会がもう少し必要だと感じている。

②研修プログラムはどのようなものか？

今年度の初期研修1年目のドクターからは新専門医制度に移行する。その一方で、総合診療医としての研修プログラムの具体的な形がよくわからず、後期研修病院やプログラムを選択するに当たっての判断材料が十分に与えられるのかが不安である。

地域医療を担う医師は、在宅医療を実現するためのチーム医療や、公的な介護福祉サービス、あるいは緩和ケアを含めた看取りなどの分野にも精通する必要があると思われるが、これらを体系的に教育していくことは可能なのだろうか。

<演題③>

「与論島方言調査実習を通して」

○曾原 純

鹿児島大学医学部医学科1年

【目的】

方言調査を通して与論島の住民と触れ合うことで生活観や死生観を知り、地域医療に従事する者の心構えを学ぶ。

【方法】

パナウル診療所で待合室に居る人々や与論の方言や文化を研究している方から話を伺った。

【結果】

体の部位や病気に関する方言の一覧表を作成できた。また、様々な年齢層の与論島の住民が様々な生活観を持つことや、本土の人々とは全く異なる死生観を持っていることが分かった。

【考察】

ほとんどの住民は方言と共通語の両方を話すことが出来るのでコミュニケーションにおいて差し支えは無いものの、医療従事者はただ医療を実践するのではなく、住民の生活に寄り添うこと、特に終末期医療において住民の独特な死生観を理解することが求められていると考えられる。

【結論】

地域医療に従事する者に必要な心構えとは、その地域の人々の生活観や死生観を理解し、一人一人に対する最良な医療の在り方を追求していくという姿勢である。またこの実習を通して、地域医療に従事することへのやりがいを実感を持たせたとともに、難しさも改めて理解することが出来た。

<演題④>

「鹿児島県の地域医療を見て」

○大漣 玄德

鹿児島大学医学部医学科3年

【目的】

鹿児島県では離島やへき地で医師が不足していると聞く。しかし鹿児島市に住んでいるだけでは地域医療の窮状は見えてこない。医師が実際に不足しているのか、不足しているならばどのように対応しているのかを知り、解決法を検討するために実習に参加した。

【方法】

鹿児島県内の診療所を3か所(松岡救急クリニック・瀬戸内町へき地診療所・ファミリークリニック)で実習した。

【結果と感想】

松岡救急クリニックは救急告示医療機関に認定される条件を満たすために、松岡院長が24時間クリニックに寝泊りして救急医療に従事していた。また救急医療に必要な医療設備は全てクリニックで負担していた。長時間の労働と、病院の経営から松岡院長には大きな負担がかかっていると考えられた。瀬戸内町へき地診療所では、二人の医師が交代で外来診療と訪問診療を行っていた。どちらの診療も患者は非常に多く医師一人に対しての負担は大きいと感じた。

ファミリークリニック そこでは医師以外の方が、患者の生活環境を考慮して、自宅の設備を整備していた。

【結論】

鹿児島の地域医療は、少ない医師の長時間労働によって支えられている。医師の負担を減らすために、医師の数を増やすと同時に、医師以外の職種にできる仕事の種類と量を増やすことが必要だと感じた。

<演題⑤>

「大学における地域医療教育と学生の効果的な能動的学習促進について」

○山崎 愛子¹, 門田 耕一郎⁴, 信吉 正治², 永吉 真子^{2・6},
山梨 啓友², 小屋松 淳³, 濱口 由子⁵, 牟田 久美子⁵, 松坂 雄亮⁵,
相良 郁子⁵, 石居 公之⁵, 久芳 さやか⁵, 清水 悠路⁴, 中桶 了太³,
永田 康浩⁵, 調 漸³, 前田 隆浩^{2・4・6}

¹長崎大学医学部医学科6年生(地域枠入学)

²長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 離島・へき地医療学講座、離島医療研究所

³長崎大学病院 へき地病院再生支援・教育機構

⁴長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 社会医療科学講座 地域医療学分野

⁵長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 地域包括ケア教育センター

⁶長崎大学大学院 革新予防医科学教育研究拠点 予防医科学研究所

社会の急速な高齢化に伴って医療・ケアに対するニーズは多様化してきており、地域医療に従事するにあたっては、医療・介護・福祉はもちろん、行政などが関わる地域包括ケアについて学びを深める必要がある。長崎大学では地域医療教育に力を入れており、低学年から多様な地域医療教育プログラムを体験してきた。こうした地域医療教育は全国的に広まってきているが、継続性や学生の能動的学習誘導については課題があるとされている。

そこで、正規カリキュラムとは別に、地域枠学生が中心となって勉強会や多職種交流学習といった能動的な取組を開始した。この学生主体の取組における運営と問題点について検討した。

2014年6月に100人規模の多職種セミナーを開催したが、企画したスタッフに対し、運営に関するアンケート調査を行なった。運営を担当することにより46.2%の学生が「学業が疎かになった」、23.1%が「健康上影響があった」と答え、運営経験が少ない学生には負担が大きいことが明らかになった。

能動的学習の利点と大学側の教育資源やネットワークを融合させ、効果的な学習環境を構築する取組が重要と考えられた。学生においては、地域医療関連のサークル活動などを立ち上げ、大学教員と協力できるような体制作りが求められる。

<演題⑥>

「久留米大学医学部での地域枠学生の現状」

○足達 寿

久留米大学医学部、地域医療連携講座

久留米大学医学部では、平成22年に地域医療再生基金事業での寄附講座として、地域医療連携講座が作られ、主に地域枠学生の支援、進路の相談を行っている。

地域枠学生の現状は、平成26年度まで久留米大学地域枠学生が10名、福岡県特別枠学生が5名の合計15名であるが、久留米大学地域枠が毎年、定員を満たしているのに対し、制約が多い福岡県特別枠は定員割れが多く、平成22年度3名、平成23年度1名、平成24年度3名、平成25年度なし、平成26年度1名、平成27年度4名の入学者数に留まっている。福岡県特別枠は、地域医療再生基金事業での実施は平成27年度までで、平成28年度以降は、地域医療介護総合確保基金の活用により実施することになっており、緊急医師確保対策奨学金は、平成36年度まで実施することになっている。

一方、久留米大学地域枠学生は、現役、一浪のみを対象に募集していることもあり、成績優秀で平成27年度は、定員を10名から15名に増やした。さらに一般地域枠推薦入学者を新たに5名募集するなど、地域医療に従事する医師の確保、診療科による医師の偏在是正に全力で取り組んでいる。

<演題⑦>

「医療系学部学科1年生を対象にした方言調査実習の試み」

○根路銘 安仁、大脇 哲洋、網谷 真理恵、指宿 りえ、
嶽崎 俊郎

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター

当センターは、医学部正規課程内で6年生全員に離島地域医療実習、2年生の希望者に自主研究、また、課程外で地域枠の学年毎に合わせてプログラムを作成し実施している。一方、学内の医療系学部学科の希望者を対象に多職種地域医療実習を実施してきた。実習は、多職種で早期より実施するのが効果的との報告がある。今回医系学部学科1年生を対象に早期実習を実施した。

医療でもコミュニケーションを良好なものとするには言語「方言」と文化「死生観」の理解が必要である。1年生は医療専門知識も乏しいため県本土とかなり異なる方言・文化のある与論島で方言調査実習させた。前後で地域医療への「興味」、「やりがい」、「勤務志向」を調査し、感想等の提出課題を評価した。結果、地域医療についての理解は深まり勤務志向も向上していた。また、方言調査だけにとどまらず、地域医療での地域の文化や生活習慣の理解の重要性を学んでいた。そのため方言調査実習は地域指向型医療人育成教育に効果があると考えられた。しかし、多職種連携教育としての効果は評価が難しかった。本研究は鹿児島大学COC事業「島嶼と火山を有する鹿児島の地域再生プログラム」平成26年度地域志向教育研究経費より助成を受けた。

<演題⑧>

「継続的に地域貢献できる医師を養成するためには」
～地域医療のイメージをかえる～

○松田 俊太郎、早川 学、桐ヶ谷 大淳、吉村 学
宮崎大学医学部地域医療・総合診療医学講座

“地域医療”は、医師としてやりがいのある仕事であるが、しかし、“地域医療”という言葉には、どうしても“医療崩壊”、“医師不足”などのネガティブなイメージがつきまとう。しかし、「困った人を助けるお医者さんになりたい！」とシンプルなイメージを持って医学部を受験した高校生は、医学生になって、医学生としての生活を送っていく中で、何らかの領域の医療技術を極めた“専門医”がかっこよくみえて、憧れるようになる。現在の日本の医学教育の実情を考えると、臓器別または医療技術により分けられる“専門医”が、医師としてのアイデンティティーを確立しやすいのだと思う。

現在、新たな“専門医”の一つとして、『総合診療専門医』が確立されようとしている。世論としては、『総合診療専門医』は、“地域医療”に貢献するのではないかと考えられている。一方、『総合診療専門医』は、従来の“専門医”の概念から考えると、患者からも医療者側からも、その専門性がわかりづらい“専門医”であるようである。“地域医療”は、その地域で共に生活し、その地域の幸福を総合的に考えて、必要なことを展開していく医療である。これは、『総合診療専門医』のアイデンティティーを満たすに十分な、他の“専門医”にはない一つの専門性であると考えられる。医学教育から、従来の医師としての完成形を変える努力をしていく必要があると考えられる。

<演題⑨>

「大分大学における地域医療従事者の育成とキャリア形成の両立への取り組み」

○上田 貴威

大分大学医学部地域医療学センター 外科分野

平成19年度から、大分県の委託事業として「地域枠」学生の奨学金貸与制度が始まり、大分県における地域医療従事者の増加が期待されている。同時に、彼らの育成とキャリア形成の両立が課題となりつつある。大分大学では、卒前教育として、3年生には地域医療学講義と地域における診療所実習(シャドウイング)、4年生には研究室配属、5年生には2週間にわたる地域中核病院での地域医療実習、6年生には地域医療学の卒業試験を行っている。また毎年夏季には、大分県との共同で希望学生(大分大学・自治医科大学)に対し、3日間にわたる診療所実習も併施し、「地域医療は地域で学ぶ」こととしている。卒後教育においては、特に「地域枠」卒業生を中心とする、大分県の地域医療に従事する若手医師を対象とした研修プログラムを作成している。これは、主として内科系・外科系に分け、地域医療に従事し「地域枠」卒業生の義務年限を履行しつつ、専門医の取得も可能となるキャリア形成の両立を目指したプログラムである。このプログラムにより、地域医療に従事する若手医師の不安が解消され、さらに地域貢献を目指す医師の養成が進むと考えられる。大分大学での卒前・卒後教育における取り組みについて述べる。

<演題⑩>

「長崎県内の総合診療専門医育成にむけて連携の取り組み」
～総合診療専門医(家庭医療専門医)養成のための長崎県版連携プログラム～

○中桶 了太^{1,6}、向原 圭⁴、井上 圭太²、近藤 慶⁵、高山 隼人⁴、
前田 隆浩³、調 漸¹

¹長崎大学病院 へき地病院再生支援・教育機構

²長崎大学大学院 医歯薬総合研究科 社会医療学講座 総合診療分野

³長崎大学大学院 医歯薬総合研究科 離島・へき地医療学講座 離島医療研究所

⁴国立病院機構長崎医療センター

⁵社会医療法人健友会 上戸町病院

⁶ながさき県北地域医療教育コンソーシアム

長崎県で活躍する総合診療医の育成を目指して県内で家庭医療専門医研修プログラムを登録している4施設のプログラム責任者は県の支援で平成25年度から継続的に協議を重ねている。初年度は研修終了時に獲得すべき臨床能力(コンピテンシー)を共有化できた。そのために統一されたプログラムを合同で運営する構想も提示されたが、それぞれの特色を生かした長崎県版「連携」プログラムとして相互に乗り入れ可能な研修体制とした。すなわち、お互いを研修協力施設として登録することで一部の研修を他の施設で行うことを可能とした。平成26年度はさらなる教育力向上ために1:専攻医に対するメンタリング制度2:指導医のためのFD開催3:新しい世代の呼び込みのための合宿企画などが検討され、導入されることになった。

この連携を活用し長崎医療センターの1名が平成25年10月から1年間、長崎大学の1名が平成27年4月から半年間、平戸市民病院で研修を行っている。それぞれの専攻医に対して登録元の指導医によるメンタリングも導入されている。

4つのプログラムが目的を共有し得意領域を活かした連携体制により地域で活躍可能な総合診療医の育成を目指している。

<演題⑪>

「地域医療実践教育拠点玉名の設置について」

○田宮 貞宏¹、小山 耕太¹、谷口 純一²、後藤 理英子²、
柚原 敬三³、坂田 正充³、宮前 志穂³、中川 美咲³、
松井 邦彦¹

1熊本大学医学部附属病院 地域医療システム学寄附講座

2同 地域医療支援センター

3同 地域医療支援機構

長期継続的に地域医療を担う医師を大学と地域の間で循環的に派遣するシステムの構築が望まれるなか、平成27年4月、熊本大内の地域医療支援機構・地域医療支援センターとして、「教育と研究」を併せ持った地域医療支援を実現すべく、地域医療実践教育玉名拠点(以後玉名拠点)を公立玉名中央病院に設置した。

公立玉名中央病院に大学教員(准教授1名、助教1名、以後玉名拠点指導医)を常駐させ、新たに総合診療科を開設、病院総合医として、診療支援を行いつつ、同時に初期・後期研修プログラムの一環として研修医を受け入れることで、地域医療機関での研修医育成・教育を試みる。

また、この研修医も医療スタッフとして玉名拠点指導医と共に勤務することで、複数の医師による地域診療支援も可能となり、併せて医学部学生の卒前教育の一環として地域医療診療参加型実習も実践する。

更に、将来的に変化する熊本県内の地域医療の現状を鋭敏に調査・解析し、既に地域に根差した医療を実践する勤務・開業医にとっての身近な医療関連講演会・勉強会を開催する機能も併せ持つことを目指す。

<演題⑫>

「熊本県の地域医療の医師不足・偏在状況について」

～県下有床病院における「地域医療アンケート調査」中間報告～

○小山 耕太¹、谷口 純一²、後藤 理英子²、柚原 敬三³、
坂田 正充³、宮前 志穂³、中川 美咲³、田宮 貞宏¹、
松井 邦彦¹

¹熊本大学医学部附属病院 地域医療システム学寄附講座

²同 地域医療支援センター

³同 地域医療支援機構

熊本県の医療体制の充実度は医師数で見ると、人口10万人当たりの医師数は266.4人と全国平均の226.5人を上回る全国10位である。特に、熊本市においてのそれは394.6人と大幅に多いのが現状である。つまり、熊本市では熊本大学医学部附属病院を含めて高度医療を提供できる病院群が集中しており、医療レベルと医師数の両面で恵まれた環境にある。一方、熊本県内の他の多くの二次医療圏においては、芦北医療圏の266.1人を除き全てが全国平均を下回っているのが現状である。最も医師数の多い熊本医療圏と最も医師数の少ない阿蘇医療圏(121.2人)の格差は3.26倍と、熊本県下の医師の偏在は極めて深刻な状況である。

この事に端を発し、2008年度、熊本大学医学部附属病院に県の寄付で地域医療支援システム学寄附講座が設置され、効率的な地域医療システムの研究等が始められた。その研究の一環として、2009年に県下有床病院に協力頂き「地域医療アンケート調査」が実施された。

その後この寄附講座の研究をより具体的に実現していくために、県では2013年12月に、熊本県地域医療支援機構を熊本大学医学部附属病院と共同で設置し、今回、これらの地域医療の支援策の推進する上で必要な地域医療の現状について、6年の追跡調査を実施し熊本県の地域医療の現状を把握し、より詳細な医師不足・偏在状況を解析したので途中経過を報告する。